

聖霊のスタディーガイド

信仰は聞くことから始まり、聞くことは御言葉によるのです

第一章：聖霊(御霊)の紹介

I. 三位一体

- A. ひとりの神が三人の人格に現れた。御父、御子と、聖霊。(第一テモテ 3:16)
- B. 三位一体 (Trinity) という言葉は「Three-in-one」(三つで一つ) という見方のほうが明確に神の考えを表すと思われる。
- C. ヘブル語で単数形の神は「El」(エル)で、複数形は「Elah」(エラ)であり、そして、3つよりも多いものを表す場合は「Elohim」(エロヒム)が使われる。エロヒムは、創世記 1:1 で「神」と訳された言葉である。

II. 聖霊は人格を持っている

- A. ある人々によって、聖霊とは単独の人格ではなく、神の「エッセンス」とか「能力」と理解されているが、ヘブル語で霊 (Spirit) は「ruach」で、息という意味もあり、ギリシャ語で霊は「pneuma」であり、風とか空気という意味もある。私たちはクリスチャンとして聖霊が人格であることを知っている。

初代教会の学者、アリウスは父なる神が唯一の真実の神であり、イエスは被造物で、聖霊は単にエッセンスであると宣言したことから、分裂の原因となった。

B. 聖霊は人としての性格を持っている

1. 第一コリント 2:10-11 御霊は探り、知っている。
2. 第一コリント 12:11 御霊は御心のままに、各々にそれぞれの賜物を分け与える。
3. ローマ 8:27 御霊の思い。
4. ローマ 15:30 御霊の愛。
5. 御霊はイエスのことを証明し、御霊ご自身の上に御父と御子を称えている。(ヨハネ 15:26、ヨハネ 16:13)
6. 御霊を指すときに個人的な形容詞が使われている。(ヨハネ 14:16-17、ヨハネ 16:7-15) ヨハネ 14:16にある「助け主」は、「parakletos」(パラクレトス)で、「横にいて助けるために来るもの」という意味である。御霊は常に私たちと共にいてくださり、私たちが頼むときに助ける用意をしておられる。

C. 個人的な働きが聖霊により帰されている

1. 使徒 13:2 聖霊は話す。
2. ローマ 8:26 聖霊は私たちをとりなす。
3. 第一ヨハネ 2:20-27 ヨハネ 14:26 聖霊は私たちに教える。
4. 使徒 16:6,7 聖霊はパウロを導き、あることを禁じることもある。
5. 創世記 6:3 霊は人と戦う。

D. 聖霊は人格として扱われている

1. エペソ 4:30 聖霊は私たちによって悲しむことがある。
2. ヘブル 10:29 私たちは聖霊を侮ることがある。
3. 使徒 5:3 聖霊は(人によって)欺かれる。
4. マタイ 12:31,32 聖霊は冒瀆される。

E. 聖霊は御父と御子と共に人格として明らかにされている

1. マタイ 28:19 聖霊は御父と御子と共にバプテスマに名のられている。
2. 第二コリント 13:14 聖霊は御父と御子と共に祝等に名のられている。
3. 使徒 15:28 聖霊は信者と共に人格として明らかにされている。

第二章：聖霊の神性

I. シェマに出てくる三位一体

- A. ユダヤ教の基本であるシェマ (の朗唱) は申命記 6:4に見つけられる

- 1.ヘブル語の神は複数形、「Elohim」(エロヒム)でここで再び使われている。
- 2.ヘブル語のひとつは「echad」(エチャッド)でまとめてひとつのことで、絶対にひとつという語の「yacheed」(ヤチッド)ではない。

II. 聖霊に見られる神の神性

- A. 神は永遠である。ヘブル 9:14は「永遠の御霊」について語られている

- B. 神は全知である。(使徒 15 : 18) パウロは第一コリント 2:10,11 で神にかかわることは御霊によってのみ知ることができると言っている。
- C. 神は遍在される。ダビデは詩篇 139:7 で、御霊はどこにでも存在すると言っている。
- D. 神は全能である。天使はルカ 1:35 で、御霊のことをいと高き方の力として語っている。

III. 聖霊を通しての神の働き

- A. 聖霊は天地創造のときから活動していた
 1. 創世記 1:1 で神という語の複数形「Elohim」(エロヒム)は三位一体の神が共に働いたことを示している。
 2. 創世記 1:2 は神の霊が水の上を動いていたと言っている。
 3. 創世記 1:26 は三位一体の神が人を造るために調和して働いている様子が伺われる。「われわれのかたちに、人を造ろう。」
 4. 詩篇 104:30 でも、御霊が天地創造に存在したことを語っている。
- B. 聖霊はいのちを与える
 1. 第二コリント 3:16 でパウロは文字は殺し、御霊は生かすからと言っている。
 2. ヨハネ 6:63 でイエスはいのちを与えるのは御霊ですと言っている。
 3. ローマ 8:10
- C. 聖霊が聖書に靈感を与えた。第二ペテロ 1:21 では「聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」と宣言している。
- D. 聖霊は御父と御子と共に働く。第一コリント 12:4-6 では教会においての、御父と御子と聖霊の働きについて語られている。

IV. 神と聖霊に関する御ことば

- A. 旧約聖書には神に関する御ことばがいくつもある。新約聖書には聖霊に関する御ことばが出てきている。だから、神と聖霊はひとつである。
 1. イザヤ 6:8-10 は神が語ることを指している。使徒 28:25-27 では同じ聖書の箇所が引用されている、聖霊が語ったと言っている。
 2. エレミヤ 31:31-33 で、神が契約を造られた。ヘブル 10:15-17 では聖霊が契約を造られたと言っている。
 3. 詩篇 95:7-11 では神の声を聞くことについて語られている。ヘブル 3:7-9 では聖霊がそこで言われていることを語っている。
- B. 聖霊を神として書かれている御言葉がある。
 1. 使徒 5:1-11 では「聖霊にうそをついた」アナニヤとサツピラの話が語られている。ペテロはまた、「あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのです。」と言っている。ペテロは聖霊を神と同党視している。
 2. 第二コリント 3:17-18 で、パウロは霊としての主について話していて、それぞれを直線関連させている。

V. 神は聖霊を用いて私たちと関係を持たれる

- A. 私たちはイエスを通して神と関係を成り立たせる。(ヨハネ 14:13、ヘブル 4:16) 神は私たちと聖霊を通して関係を成り立たせる。(ローマ 8:16)
- B. 私たちが肉体のレベルで存在するとき、体に私たちは支配されていて、魂と霊は二番目と三番目に存在する。私たちが、生まれ変わったとき、私たちの霊は第一に存在するようになり、聖霊が私たちを支配するようになる。聖霊は、私たちがイエスの姿に似た者とされるための助けとなる。

第三章：信者の生活における聖霊の働き

I. 聖霊は助け主

聖霊は私達がクリスチャンとして歩むとき、導くためにとりにいてくださる助け主である。

II. 聖霊は教える方

聖霊は私達の先生である。(ヨハネ 14:26、第一ヨハネ 2:27、第一コリント 2:13,14)

- A. 生まれ変わったとき、私たちは、霊の次元に入ります。この次元は、私たちの経験や知性で到達できる範囲を超えた神の御わざを聖霊によって教えられることが可能になる。(第二コリント 4:18)
- B. 聖霊は私たちが読んだことのあるまた、聞いたことのある御ことばを思い出させる。(ヨハネ 14:26) 必要などに適切な御ことばが出てくるというのはとても素晴らしいことである。

III. 聖霊は導き

聖霊は全ての真実に私たちを導く。(ヨハネ 16:12-13)

- A. 聖霊は私たちに真実と偽りの教えを見抜く力を与える。
- B. もし、私たちが心を開き聖霊に導かれ聖書を読むなら、真実から迷い出ることではなく、クリスチャンとして生活するうえで必要な全てのものをもつことができる。

IV. 預言の中の聖霊

聖霊はこれから起こることを私たちに見せる。(ヨハネ 16:13) 聖霊は私たちがダニエル書、ヨハネの黙示録、エゼキエル書に出てくる預言を理解するために助けとなる。私たちは、世の終わりに生きているので、これらの預言は日に日に明確になってきている。

第四章：信者の生活における聖霊の力

I. 聖霊の約束

- A. 使徒 1:4-5 には、聖霊が信者に与えられるという御父による約束が含まれている。
- B. ヨエル 2:28 では御父が終わりの日に全ての者に聖霊を注ぐと言っている。

II. 聖霊の力

- A. 使徒 1:8 で聖霊が私たちが神の証し人としてクリスチャンの生活を送れるように力を与えてくださることを知ることができる。
 1. 聖霊が力が私達の内になくはクリスチャンの生活を送るのは不可能である。(ローマ 7:15-25、ガラテヤ 5:17-18、マタイ 26:41)
 2. イエス・キリストは私たちが見習うべき模範である。(ヨハネ 14:8-9)
 3. 力という語はギリシャ語で「dunamis」(デュナミス)といい、英語の単語「dynamic」(力強い)の語源である。
 4. 真実の証人は信仰によって生きる。
- B. ペテロが聖霊の力を受ける前に、イエスの仲間だと言うことを明らかにされるのを望んでいつつ(マルコ 14:27-31) 恐れていた。(マルコ 14:53-72) 聖霊の力を受けた後、イエスを裁いたその同じ者たちの中で、ペテロは大胆に証しし、(使徒 4:5-23) キリストを除いては、救いはないと堂々と彼らに語ったほどであった。そして、ペテロが信者の中に戻った時、彼らは大胆さが増し加えられるように祈った。(使徒 4:23-31)
- C. 私達は、外見を自分自身で変えようと努力するのではなく、聖霊によって、内側から変えていただくべきであり、それによって、自分が内側から変わることを望むべきだ。(ローマ 8) 私達が、生きる中で、ひとつひとつの領域を聖霊に明け渡すことで、聖霊が私達をキリストに似た者としてつくり変えてくださるのだ。

第五章: つくり変える働きをする聖霊

I. 義の標準

- A. マタイ 5:20 でイエスは弟子たちに、もし天の御国に入りたければ、彼らの義が、法律に厳格に従っている律法学者や、パリサイ人たちの義にまさらなければならないと言われた。
- B. マタイ 5:21-47 で、イエスはどのように律法を守るべきかの説明をしている。パリサイ人は律法に従って、外見の義を実行していたが、イエスは、律法は内側の清さも要求されると言っている。
- C. マタイ 5章の最後の節で、イエスは彼らに天の父が 完全であるように、完全でありなさいと言っている。

II. イエスを通しての救い

- A. 私達は神の要求される義の標準を満たすことができないので、神は私達に神に近づく別の方法を与えられた。ヨハネ 6:28-29 で、人々がイエスに神のわざを行なうために、何をすべきでしょうかとたずねると、イエスは、「あなたがたが、神が使わした者を信じること」と答えた。
- B. 私達がキリストを私達の人生に受け入れると、神の霊が入ってきて、キリストに似たものとされるために私達の内に働き始める。(第二コリント 5:17)
- C. イエスは神が人を創造された時に、望んだ人の形の模範である。(創世記 1:26) ヨハネ 8:29 でイエスはいつも父の御心にかなうことを行なったといており、マタイ 3:17 で、神はイエスについて、「これは私の愛する子、私はこれを喜ぶ。」と言っている。

III. 聖霊は私達をキリストに似たものとしてつくり変える

- A. 神の霊は、私達の内に働かれ、キリストに似たものに私達を変える。(エペソ 4:13)

- B. 神のあらかじめもっておられた計画は、私達が御子のかたちと同じ姿に変えられることである。(ローマ 8 : 29)
- C. 私達が神の理想をイエス・キリストに見るとき、私達は聖霊によって、栄光から栄光へと、それと同じかたちに姿を変えられて行く。(第二コリント 3:18) 私達は、真実に目隠しされていないキリストのあけ開いた、覆いを取り除けられた顔を見るべきだ。
- D. 私達はキリストを御ことばの中でしか見れないが、聖霊によって御ことばが私達の心に生きてくる必要がある。

IV. 私達はキリストをとおして、神の子供とされる

- A. 私達は自分の義によって神の子とされるのではなく、イエス・キリストの信仰によって、神の子とされる。(ヨハネ 1:12、ローマ 8:16-17)
- B. 私達がキリストに似た姿にされるにつれて、贖われた霊が、贖われていない体に存在することから来る問題が起きてくる。私達はそれらの肉の思いから解放され満たされ、豊かな、溢れ流れる霊の生活を望むのである。(第一ヨハネ 3:2、第二コリント 5 : 4、ローマ 8:22,23)
- C. 聖霊が私達の内に働き続けるうちにキリストに似た者ともっと変えられて行き、成長することに喜びがあることに気付く。「目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。」(詩篇 17:15)

第六章：御霊の実

I. 聖霊は神のアガペの愛(無償の愛)を私達に有効にしてくださる

- A. クリスマンの印は、その人を通して出てくるアガペの愛である。(ヨハネ 13:35)
- B. アガペの愛は深く、霊的で、与える神の愛で、エロス(肉体的愛)又は、フィレオ(兄弟愛、友達愛)にまさっている。アガペは超自然的な愛である。

II. アガペの愛の叙述

- A. 第一コリント 13 章はアガペの愛の美しい叙述である。
1. パウロはアガペの愛の叙述を他の御霊の賜物にまさると述べている。(1-2 節)
 2. アガペは、又、私達の持ち物や、体の犠牲よりも重要である。(3 節)
 3. アガペの愛は乱用され続けても、最後まで親切である。(4 節)
 4. 「自分の利益を求めず」とはこの愛は自己中心を主張し続けないという意味である。(5 節)
 5. 「簡単に(怒らず)」は翻訳者によって付け加えられた語である。愛は怒らない。(5 節)

III. 神はアガペの愛の源である

- A. アガペの愛が私達のうちに流れると、私達は死んでいた者から、生きた者となる。(第一ヨハネ 3:14)
- B. 私達は、アガペの愛を必要に応じて使えるわけではない。私達にこの愛がかけられていると思ったら、私達は聖霊によってアガペの愛で心を満たしていただくように、神に願う必要がある。
- C. 私達の肉は正しいことをしようとするとき、霊と戦う。(ガラテヤ 5:17)

IV. 御霊の賜物はアガペである

- A. ガラテヤ 5:19-23 では肉の働きと御霊の実が比べられている。働く領域は肉体的領域である。御霊の実は神の方法である；神との関係から来る自然な形である。
- B. キリストにとどまる者は実を实らせる。私達が実を实らせた時、父なる神は私達を洗い清めるので、私達は続けて実を实らすことができる。もし、私達がキリストにとどまらないならば、私達は、実を实らすことができない。(ヨハネ 15 : 1-8)
- C. 霊の賜物が価値のあるもので、必要なものであるのに対し、御霊の実は「よりすぐれた賜物」としてパウロは勧めている。(第一コリント 12 : 31)
- D. 「しかし、御霊の実は、愛(アガペ)です。」(ガラテヤ 5 : 22) 神の超自然的な愛を表す 8 つの形容詞に続く、御霊の実がひとつある。
1. 喜びは愛そのものである。私達が愛するとき、私達は喜びで満たされるので、普段ならみじめだと思ふことでさえ、快く感じる。
 2. 平安は敵対心を休止する以上のことだ。悪を望まない愛は真実の平安の基本である。
 3. 寛容は、軽べつされ続けた後でその屈辱をも忘れるほど親切になることができる愛の特徴である。
 4. 愛は親切であり、不快でなく、感情をいらだたせない。
 5. 愛は、肯定的な動機のためだけの善意である。ある人は間違ったことをしたことからくる、結果を恐れて、「善いことをする」が、それは本当の善意ではない。
 6. ここで書かれている誠実は、第一コリント 12 : 9 であげられている霊の賜物ではなく、人の中にある愛の信頼のことである。
 7. 柔和は自分の自慢をせず、人から誉められたり、榮譽を受けたりしたがない。
 8. 自制とは、適度のこと。

E. これらのアガペの愛の特徴は、聖霊が私達の生活の中で働いていることの結果である。

第七章：聖書の説明をする聖霊

I. 聖霊の導き

聖霊は神に関すること及び、神の言葉を私達に明確にする。（第一コリント 2：10）

- A. 生まれながらの人間は、その人に悟る聖霊が宿っていないので、神のことを理解することができない。（第一コリント 2：14）
- B. 御霊は、私達が神を愛しているので、神が私達に備えておられることを啓示する。（第一コリント 2：9-10）これらは、神が人々に今備えているものを指し、天に属するものの事ではない。
- C. 「いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかにも、誰が知っているでしょう。」私達は、私達自身の心の中にある本当のことしか知らないで、他人をだますことができる。「神の御心のことは、神の御霊のほかには誰も知りません。」（第一コリント 2：11）神に関する事で、人は理解できないことがあり、御霊だけが知っている。
- D. 多くの人は、聖書が何に関することなのか、人間的知性の面から追求して発見しようと試みる。その人たちは、聖霊によって心が開かれなければ、霊的なことを理解することができないので（第一コリント 2：12-14）それらは彼らには愚かなことなのである。

II. 聖霊：私達の先生であり、霊的なことの導き

- A. イエスは聖霊が私達に教えることを約束された。（ヨハネ 14：26）私達が、聖書を読むために座るとき、必ず、私達の心と精神が開かれ、読んでいられることを受け入れ、理解できるように聖霊にたずね、祈ることから始めるべきである。（第一ヨハネ 2：27）
- B. 神の言葉は、私達の霊的食物であり、クリスチャンとして、それなしでは成長することができない。
- C. 私達が必要なとき、聖霊の導きによって思い出せるよう、聖書を読み私達の心に御言葉を植え込むことは大切である。（ヨハネ 14：26、詩篇 119：11）
- D. 聖霊は、私達を神の真実に導き、私達が準備できるよう、私達にこれから起ころうとしていることを啓示する。（ヨハネ 16：13、第一テサロニケ 5：4）

第八章：世に存在する聖霊

I. イエスは聖霊を送るという約束をされた

- A. イエスがこの地上で活動をしていた時、一度にひとつの場所にしかいることができないように規制されていた。聖霊は体の形に束縛されていないので、一度にどこにでも存在することができる。（ヨハネ 16：7）
- B. 御言葉は、地の果てばてにまで届くことになっていたのので、イエスは聖霊によって、教会により効果的に働くことができた。

II. この世での聖霊の働き

- A. イエスは、人々がイエスを信じなかったので、聖霊が世にその罪を認めさせると言われた。（ヨハネ 16：8-9）人が裁かれる唯一の罪はイエス・キリストを主として、また、救い主として信じないことである。（ヨハネ 3：17-18）この罪は、聖霊に対する赦されざる冒とくの罪である。なぜなら、聖霊が私達の罪を気付かせるからである。
- B. 聖霊は、イエスが天に昇られたので、義についてこの世に認めさせます。（ヨハネ 16：8-10）神がイエスを天に迎えたとき、神は人が神に受け入れられるために満たさなくてはならない義の基準を置かれた。
- C. 聖霊は、この世の君（サタン）が裁かれたので、この世に裁きについて認めさせる。（ヨハネ 16：8-11）
 1. イエスが十字架につけられ私達の代わりに死なれた時、サタンは私達に対して神の義に反することをを行うことを強いる力を失った。（コロサイ 2：14-15）
 - a) 罪のうちにあり、サタンに強いられた私達の古い性質はイエスの十字架の上で死に葬られた。
 - b) 私達が罪を犯すとはどういう意味だろう。それは、キリストと聖霊を通して神が用意されたことを、私達が適切に用いていないという意味である。私達は、意識的に聖霊の力とサタンに対するイエスの勝利に従うべきである。
 - c) サタンによって、私達の今日の生活に働く力は奪われている。なぜなら、サタンは私達に対して権威もなく、支配する権利も持たないからである。もし、イエス・キリストの名によって、サタンが去るように言いつけたら、サタンは出て行かざる終えない。

- d) 私達が神にサタンを私達の生活から取り去るように願うとき、とても具体的でなければならない。なぜなら、サタンはとても頑固なため、握った足は簡単には手放さないからである。また、サタンが追い出されると、もう一度なくした物を取り戻そうと攻撃してくるため、持続的な祈りによって、聖霊の力を通して、持っているものをはきかないようにすることを忘れてはならない。

第九章：終わりの日の聖霊の働き

I. 聖霊を邪魔する力

- A. 聖書では、終わりの日には「諸国の民は不安に陥って悩み」（ルカ 21:25）と言っている。「不安に陥る」という言葉は「逃げ道のない」という意味もある。諸国は解決しようのない問題を持つようになる。
- B. 第二テサロニケ 2:1-12 は、終わりの日の聖霊の働きを明らかにしている。
1. 「消える」とは教会がとられるということを指している。
 - a) これはイエス・キリストが教会のために来るときのことを言っている。イエスはこの時点で地上には降りてこられないが、私達は空中に引き上げられ（ギリシャ語でぱっと取り上げるという言葉）イエスに会うのである。
 - b) イエスの再臨はその7年後、教会と共にイエスが地上に帰って来、神の国を建てる時に起こる。
 2. 「滅びの子」はイスラエルの神の宮の中に座を設ける反キリストのことである。（4節）これは、ダニエル書 9:27、11:31、12:11 とマタイ 24:15 で預言されている「荒らす者の絶滅」のことである。
 3. 6節はサタンが反キリストを、受け入れざるおえない状態になっているこの世に出すのを引きとめている、又は、邪魔している聖霊の力を指している。
 - a) 反キリストが、買い物をするときに使う身分証明のシステムを紹介する時に経済は落ち着きを見せる。（黙示録 13:14-17）人々は買い物にクレジットカードをもっと使うようになることによって、数を使った売り買いに慣れてきている。
 - b) 現在、カリスマをもった、強烈な政治的リーダーは存在しない。人々は政治に失望し、答えを出してくれる誰かを探している。（ダニエル 9:26-27 「1週間」はここでは、7年を指す）
 - c) 人々は中東情勢の問題と世界で勃発する戦争にうんざりしている。人々は反キリストの平和の計画が三年半続くので、反キリストを平和の人として崇拜するようになる。
 4. 反キリストの霊は、世界でもうすでに動いている。（第二テサロニケ 2:7、第一ヨハネ 4:3）サタンはこの欺く者に今権力を持たせたいのである。（第二テサロニケ 2:8-12）しかし、教会を天に上げるまで、聖霊がその働きを抑えているのである。（第二テサロニケ 2:6）
 - a) 黙示録 4:1 では、教会に携挙が起こり、次に地上に起こる大きな出来事は、白い馬に乗った反キリストが現れ（偽りの義の象徴）、平和をもたらすものとして人々を信じさせる。（黙示録 6:2）
 5. クリスマンとして私達は、反キリストを心配するのではなく、イエス・キリストの栄光の現れを期待するべきである。（ルカ 21:28、マタイ 25:1-13、ローマ 13:11）

第十章：聖霊の印

I. 神の子供が受ける祝福

- A. エペソ 1:1-14 に、パウロは私たちが神の子供として与えられている、素晴らしい祝福が挙げられている。私達は、選ばれ、定められ、受け入れられ、贖われ、赦されていることによって、祝福されている。神は御心を私達にお示しになり、私達に相続を与えてくださる。
- 1.13 節でパウロはクリスマンは「約束の聖霊を持って」証印を押されることを話している。まず、私達は福音を開き（ローマ 10:14）、私たちの罪が神と私達の隔たりとなっていることを知り（イザヤ 59:1-2）、そして、私たちの救いの神の計画としてのキリストを信じなくてはならない（ヨハネ 3:16）。信じると、私達は聖霊によって、証印を押されるのである。
- a) 聖書が書かれた時代、証印はおもに持ち主を示すはんことして、使われていた。ローマの商人たちは、エペソに行き、商品を選び、指輪についているはんこで証印を押し、家に帰っていった。商品がローマ近辺の港につくと、商人たちは、自分の証印の押された商品を請求した。
 - b) 私達は、（神を）信じると、神は私達を、神の持ち物として、権利を主張される。神に属するものであるという証印は、私たちの内に住まれる、聖霊なのである。
- B. 第二コリント 1:22 でも聖霊の証印についてあげられている。神について、パウロは、「神はまた、確認の印を私達に押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」ここで、「保証」とは、頭金のことを指している。聖霊は、神に属するものの印であるだけでなく、神が私達を買い取り、贖うまでの頭金なのである。
- C. エペソ 4:30 で「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」と言っている。エペソ 1:14 では、「贖いまで」クリスマンは証印を押されているとも言っている。神は聖霊を私達に与えることで、贖いを完全にしようとしていることを宣言している。私たちの贖いは、私達が体から（肉体）から解放されるまで、完全ではない。

1. パウロは、クリスチャンが幕屋（肉体）にいる間、「重荷を負っている」ことと（第二コリント 5:4）、全ての被造物が私たちの体が贖われることを待ち、うめいていること（ローマ 8:22-23）を話している。
2. パウロはまた、私達の今の体を幕屋にたとえているが、神が私達に「神の建物、それは、人の手によらない、天にある永遠のいえ」（第二コリント 5:1）すなわち、新しい体を与えようとしているとも言っている。私達は、幕屋は一時的な住か、家は永遠の住むところと理解できる。私たちの神による贖いは、痛みや、疲れ、肉の誘惑に支配されることのない、新しい天にある家（体）が含まれている。
3. 黙示録 5 章でヨハネは、イエスが天で贖いを完成する光景を描いている。イエスは十字架の死によって、この地上を買い取り、イエスを通して救いを受けるものに証印を押した。今、私達は神が私たちのうちに神の贖いの働きを終わらせるのを待っており、それは、もうすぐに起ころうとしている。ハレルヤ！

第十一章：教会の中での聖霊の働き

I. 御霊の賜物の目的

A. 第一コリント 12 章で、パウロは教会の中でふさわしいバランスの取れた御霊の賜物の用いられ方について論じている。

1. 一節の「賜物」は訳者によって加えられたものである。パウロは、「プネウマティコス (pneumatikos)」という「霊的なもの」という意味の語を用いている。パウロは、彼の書簡のはじめのほうで、肉体の問題を扱っており、そして、ここで、霊的なものについての議題に移っている。「さて、兄弟達。御霊の賜物についてですが、私は、あなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。」
2. 7 節で、パウロは、コリントの人々に「みな益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」と言っている。神は、私達が他のものから退いて、神の祝福を楽しむために御霊の賜物を与えるのではない。その代わりに、賜物と御霊の現れはみな益となるためなのである。神は、人が誉められるために賜物を与えるのではなく、イエスがほめたたえられるためにそうするのである。
 - a) ひとつのこのルールについての例外は、異言の賜物である。異言の賜物は、その信者を成長させるために与えられる。パウロは、彼の祈りの生活の中で、多く異言を用いたことを語っているが、「異言を話すものは、その人自身を成長させます。」

II. キリストの体としての教会

A. 賜物と働きにいろいろな種類があるように（第一コリント 12:4-6）、体にもそれぞれの器官と機能がある。パウロはよく、キリストの体を人の体にたとえて、分析している。（第一コリント 12:12-31、エペソ 4:15-16、ローマ 12:4-5）

1. 私達が教会を体として見るとき、キリストを頭として見るべきである。キリストは、体を管理し導くべきである。聖霊は体の神経で、イエスからのメッセージを体の各器官に送り、スムーズに体が動けるよう調整している。
2. 体の各器官はそれぞれ欠かすことができない機能をもっている。私達は、苦戦したり、ほかの人の部分をうらやんだりせず、神が私達を置いた体の部分のその場所で機能しなければならない。もし、私達の生活にスムーズな流れがなければ、私達が、ただ自分のしたい活動を選んでいくのではなく、霊的に導かれたものの中にいるかどうか確かめるべきである。
3. 聖霊は御霊の賜物を授ける権限を持っていて、（第一コリント 12:31）聖霊が、私の賜物が何かを決める。
4. 体は全ての器官が健康に機能する必要がある。私たちは共に集い、礼拝し交わり、励ましあう必要がある。
5. 私達は、お互いに気づかい、他のものが苦しめば、共に苦しみ、尊ばれば、共に喜ぶべきである。（第一コリント 12:26、ローマ 6:13）

III. 体において賜物の務め

A. エペソ 4 章でパウロは体においての賜物の務めについて論じている。

1. 12 節で、パウロは賜物の務めの目的は、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストの体を建て上げるためであると言っている。
2. 13 節で、私達は、聖霊は体の中で働かれるのは「キリストの満ち満ちた御たけにまで達するため」であることを見ることができる。
3. 14-16 節で、パウロはもう一度、聖霊は、キリストの体を建て上げるために用いられることを指摘している。

IV. どのように御霊の賜物を受けるか

A. ローマ 12 章で、パウロはどのように御霊の賜物を受け取り、神に用いられ、私達が体のどの部分なのかを見つけるかを説明している。

1. 1-2 節でパウロは、私達の体を「神に受け入れられる、聖い」、「生きた供え物」としてささげることによって、神の完全な意思を知ることができるとしている。
 - a) 私達はこの世と調子を合わすようなことをせず、神を求め、導きを待つことによって、心の一新によって自分をかえなければならない。
2. パウロは、3 節を御霊の賜物について、思うべき限度を超えて思い上がってはいけないという警告によって始めている。最も危険な御霊の賜物の用い方のひとつは、プライドである。私達は、神が私達を用いるときに、神の恵みを示していることをいつも覚えていなければならない。なぜなら、私達は、神なくては、価値のない罪人だからだ。

第十二章：教会での聖霊の流れ

I. 聖霊の器

神は、この世において望まれている御わざを行うために用いるための器を探している。（第二歴代誌 16:9）もし、私達の心と人生が、神の計画と調和しているなら、神は私達を、愛と力と聖霊を必要としているこの世に流すための、手段として用いる。聖霊は私達が、神の目的と計画に沿えるように助けとして与えられた。

II. 御霊の流れ

- A. 私達が救いを受けたとき、それと同時に聖霊も私達の内に住むために受けるのである。しかし、私達が経験できる、それよりも深い関係が存在する。
1. ヨハネ 7:37-39 で、ヨハネはイエスが誰でもイエスが与える水を飲むなら、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになるという約束をしていることを語っている。ヨハネはイエスが聖霊について話していたことを説明している。私達は、私達から流れ出る聖霊を持つことができる。
 2. 使徒 8:15-17 でペテロは信者が聖霊を受けるように祈るため、サマリヤは行った。それは、「聖霊がまだ誰にも下っていなかった」からである。(the epi experience) 御霊の注ぎは私達の人生の内に溢れ流れる聖霊をもたらした。
 3. 使徒 19:1-6 でパウロはエペソへ行き、そこで信者が聖霊を受けるように祈った。

III. 聖霊の現れ

- A. 第一コリント 12:31 でパウロは私たちに「よりすぐれた賜物」を熱心に求めるように命令している。「よりすぐれた賜物」とな何か。
1. もし神に、あなたの心の奥底にある称賛と愛を伝える必要があるなら、この状況でよりすぐれた賜物は異言である。(第一コリント 14:14)
 2. もし誰かが病気なら、この状況でよりすぐれた賜物は癒しの賜物である。
 3. もし誰かが盲目なら、奇跡の賜物が多分一番ふさわしいだろう。
 4. もし私達が神に心を開き御霊に歩んでいるなら、神はどんな賜物も私達を通して現す。多くの場合、私達は特定な賜物を与えられるが。
- B. 第一コリント 12:8-12 に、御霊の賜物のリストの一部が与えられている。パウロがローマ 12:16 で、預言の賜物について書いているように、すべて、これらの賜物は信仰によって実践される。
1. 知恵のことばと知識のことばとは違いがある。知識は、事実を理解したことで、知恵は知識を適切に用いることである。
 - a) ステパノが議会の前に立った時、聖霊が知恵のことばを彼に与えた。(使徒 7 章)
 - b) パウロが議会の前に立った時も、聖霊が知恵のことばを与えた。(使徒 23 章) c) 祭司長達と長老達が紛らわしい質問でイエスを陥れようとした時、イエスは答え、知恵のことばを働かせた。(ルカ 20:21-26、マタイ 21:23-27)
 - d) 教会が異邦人の課題を解決しなければならなかった時、ヤコブに知恵のことばが与えられた。(使徒 15:13-21)
 - e) クリスマン生活において、最も大きい問題のひとつは、ある事が自分の心から来ているのか、神の靈感によるものかを見分けることである。ペテロは御霊の靈感により、イエスが神の子であると宣言し、その後、サタンからの思いで、イエスを非難した時、この問題を体験した。(マタイ 16:13-23) この問題から私達を助けるため、神は見分ける賜物を与えている。(10 節)

第十三章：知識のことば

I. 知識の現れ

- A. 聖霊は、神のご意志に応じて私達に賜物を与える。二人の人に同じ賜物が与えられたとしても、その人たちの内に違うように働くことがある。(働きの多様性第一コリント 12:6)
- B. イエスはたびたび、知識のことばを表した。(コロサイ 2:3)
1. ナタニエルがイエスのもとにつれて来られた時、主は彼に、以前何をしていたか尋ねた。(ヨハネ 1:45-51)
 2. イエスは、弟子達を村へ送り、そこで、何が起るかを話した。
 3. イエスはペテロに魚を取って魚の口を開いて、銀貨を取り、収税人に払う様に言った。
- C. エリシャは旧約聖書のどの預言者よりも、知識のことばを多く実行していた。
1. エリシャがイスラエルの王に、シリアの王のたくらみを警告した。(第二列王記 6:8-12)
 2. ナアマンに、ヨルダン川で7回体を洗ったら、癒されることを言った。(第二列王記 5:19)
 3. 仕える者ゲハジが何を考えているか言い当てた。(第二列王記 5:20-27)
 4. シュケムの女が、翌年男の子を産むことを悟った。(第二列王記 4:16-17)
 5. シュケムの女の息子が死んだ時、エリシャに主が現れなかったため、エリシャは驚嘆した。それは、エリシャが何が起るのか知ることに慣れていたのである。(第二列王記 4:27)
- a) 私達は、神の賜物は完全に神によって支配されていて、私達がそれに反して、働かせることのできるものではないことが分かる。
- D. 使徒パウロは知識の賜物を実践した。
1. パウロが船でローマへ行った時、彼は船上の人々にその船が沈むことを警告した。(使徒 27:10)
 2. その後、パウロは乗船していた者が、誰も死なないが、(使徒 27:23-26) ある島に打ち上げられることを告げた。
- E. 神は、私達が何も関係のない何かをしている途中に、知識の賜物を与えてくださることがあるが、私達は、知識の賜物を与えられるよう、神の声を聞こうと求める時、意識的に黙想する必要がある。

第十四章：霊を見分ける賜物

I. 見分ける霊

- A. 黙示録 2:2 でイエスはエペソの教会に彼らが霊を見分けることができるので、命令した。彼らは偽者の使徒を見分け、彼らの教えを受け入れなかった。
- B. 偽預言者達や教師達はほとんどが正しい事柄（複数）をよく言う。私達は気を付けなくてはならない。なぜなら、彼らの教えは滅びにつながり、彼らのうそは巧妙で、間違っているからである。
- C. 人々は、気を付けて聞かないので、偽預言者たちに聞き入ってしまう。その人たちは、メッセージの中の真実から、目隠しされており、うそを見抜けないのである。
- D. 間違った教えによって、惑わされるもう一つの理由は、神の御ことばを知らないからである。その人たちは、念入りに聖書を勉強することによって、信仰を植えつけていないのである。
- E. 偽預言者かどうかを試す、二つの方法。
 1. その人の証を聞く
 2. お金に執着していないか見る。（神が導く時、神は養われる）

第十五章：信仰の賜物

I. 私達の信仰は神から来る

- A. イエスは私達に「神に信仰を持ちなさい。」（マルコ 11:22）と命令し、イエスは、この命令を成就させるための能力も私達に与えている。（ローマ 12:3、ヘブル 12:2）
- B. ヘブル 11 章で神からの信仰について書かれている。
 1. 信仰は目に見えないものを確信すること（1 節）
 2. 私達が神の御前に行くとき、二つのことを信じなければならない。
 - (1) 神が神であること
 - (2) 神を求める者に神は報酬を与えること
 3. 信仰は不可能を可能にする（33-36 節）

II. 無限の信仰

- A. もし、神を知っていたら、神は私達の人生で行われる事に限度を定めない。御ことばは、神についてのふさわしい概念（考え）を私達に与える。（ローマ 4:21）
- B. 私達の神の信仰は盲目ではない。信仰の人は多くの場合、他の人たちが見えるよりもよく見ることができる。（第二列王記 6:15-17、ヘブル 11:27）
- C. 「信仰による救い」（エペソ 2:8）と「生きる信仰」がある。（出エジプト 14:15、ヨシュア 3 章、6 章）生きる信仰の持ち主は、敵が滅ぼそうとする力よりも、助けると言う神の約束をより理解することができる。この信仰は、信じるだけでなく、行動に表している。

III. 信仰の賜物

- A. 信仰の賜物は、愛のうちに持ちいらなければならない。（第一コリント 13:2）
- B. 全ての御霊の賜物は、信仰によって受け、信仰によって用いられなければならない。（ローマ 12:6）
- C. 複数の御霊の賜物が、同時に働くことが時々あるが、御霊は全てを調和させ、御霊の働きがお互いのじゃまをすることは決してない。（使徒 14:8-11、使徒 20:9-12、使徒 3:1-8）
- D. ペテロは、イエスを信じる信仰と、イエスによる信仰がある人を癒したと言っている。（使徒 3:16）
- E. 信仰を実践する時、信仰が増し加えられる。
- F. サタンは、霊的な山のすそで待ち伏せし、私達の信仰を滅ぼそうとする。
- G. 私達の信仰は、信仰の一步を踏み出した後、直ぐに結果が見えない時に試される。多くの場合、神が働く前に一定の時間がおかれており、私達は信仰と忍耐をもち、神を待たなければならない。（ヘブル 11:1、10:36、6:12、ヤコブ 1:3）

第十六章：奇跡の賜物

I. 奇跡の性質

- A. 私達は神を信じられないなら、奇跡も信じられない。(使徒 26 : 8)
- B. 奇跡は私達が知っていて、理解する自然の法則を超えた法則によって、神が働くことである。神は私達の知っている法則を超えている。(イザヤ 55:8、コロサイ 2:2-3)
- 1.私達が、今日あたりまえと思う物事の中には、100年前だったら、奇跡と思われるようなことがある。
 - 2.自然の法則が他の法則に取って変えられると、自然の法則が無効になるわけではない。
- C. 奇跡の危険性
- 1.全ての奇跡が神からのものとは限らないので、奇跡ばかりを追い求めるのは、危険である。ある奇跡は、サタンのしわざであり、欺くためのものである。(第二テサロニケ 2:9)
 - 2.奇跡の賜物が私達を通して働いたとすると、私達は自分の益のために使おうとする誘惑にかられる。(ルカ 4 : 1-4)
 - 3.私達を通して行われた奇跡について人から称賛を受けるのは危険である。(使徒 14:8-18)

II. 奇跡の賜物

- A. 神は私達の生きているこの時代にも、モーセやエノク、ヨナ、イエス、フィリップ、パウロやペテロと同じように奇跡を働かせたいと望んでいる。私達がキリストと共に十字架にかかられ、キリストが私達の人生の中に住んでいるなら、私達も用いられる。
- B. 私達が奇跡の賜物を持っているなら、いつでも奇跡を行うことができるわけでない。聖霊が賜物を支配している。
- C. 私達は神のできることを考える時、神の限度を拡大する必要がある。神はどんなことでもできる。(創世記 18:14)

第十七章：癒しの賜物

I. 病気と癒し

- A. 病気や老化はアダムとエバの罪と共にこの世に存在するようになった。病人はその人の罪のために病気だとは限らない。この世の罪のためなのである。
- B. イザヤ 53:5-7 では、預言的にイエスが私達の癒しのために受けた苦難について語っている。イエスは、十字架の上で、私達の救いと打たれることによる癒しの代価を払ったのである。
- C. 神は私達の癒しを約束していない。(出エジプト 15:26)
- D. イエスのミニストリーは癒しで満ちていた。(使徒 10:38) イエスは主の名によって癒されるよう弟子達を送り出した。癒しは信者の印なのである。(マタイ 10:1、マルコ 16:15-18)
- E. ある人は、奇跡と癒しは使徒の時代の教会で終わったことだと言うが、A. ゴードン氏は彼の本、「癒しの賜物」の中で、「癒しは教会史全体にわたって起こることである」と言及している。

II. 癒しの賜物

- A. 私達がもし癒されたら、癒しの賜物を受けたのである。時には、私達を通して他の人が癒される場合がある。
- B. 癒しの賜物はいろいろな形で働く。賜物は、どの人にも同じ働きをするとは限らない。
- C. 私達は、他の人の癒しのために祈るのに、みなが同じ癒しの賜物を持っている必要はない。信者はお互いに祈るべきである。(ヤコブ 5:14)
- D. 正餐式の時、イエスが私達のために体を打たれ、代価を払うことによって私達が受けた癒しを感謝するべきである。(ルカ 22 : 19、第一コリント 11:30)

第十八章：異言の賜物

I. 異言の賜物について

- A. イエスは異言で話すのは、信者の印であると言った。(マルコ 16:17)
- B. 使徒 2 章には、信者にどのように異言の賜物が与えられたか記されている。「御霊が彼らを話させた」とは、「御霊が彼らを語らせた」又は、「御霊が話す力を与えた」(4 節)とも訳せる。集められた群衆は信者がいくつもの違う方言(言葉)で話すのを聞いた。

C. 言語は人々の間で、特定の音が特定の意味を持っているという合意である。

II. 異言の賜物の使用

A. 異言の賜物は、霊によって私達が知性によって感情を表さなくても、霊によって私達が感情を表現するのを可能にする。私達が感じたことを言葉で表せない時、祈りの生活がもっと満たされるので、私達の理解の限度を超えた霊の言葉を用いるのである。

B. パウロは私達の一番ふさわしい異言を用いる場所は、公の礼拝でなく（第一コリント 14 章）個人的なディボーションの時であると教えている。

1. 異言の賜物の目的は神との対話
2. ある教会で「異言のメッセージ」を伝えることが許されているが、実際その発言は「メッセージ」では全くない。なぜなら、異言は神に直接向けられているからである。
3. 多くの場合、「異言のメッセージ」に続く「解き明かし」は実は、預言なのである。なぜなら、神から教会へ語られたことだからである。異言の解き明かしは神への祈りなのである。（使徒 2:11）
4. パウロは私達が異言の賜物を制御できると示している。御霊はだれかの異言を強制的に解き明かすことはしない。私達は、御霊が働いていると感じたら、自分だけで神に向けて静かに話すことができる。（第一コリント 14:28,33）
5. ある人がかん高い声でどなったり、音を出しつづける時、それは御霊が話しているのではなく、その人が神に反応しているのである。私達は異言でささやくこともしようと思えばできる。

C. 御霊は私達が祈りで何と言ってよいのか分からない時に助けてくれる。（ローマ 8:26-27）

1. もし私達が祈りが必要とされる問題において、何が必要か分からなかったり、神の意志が確かでない、私達は、神の意志と全く反対のことを願ってしまう可能性がある。しかし、御霊による私達の祈りは、いつも神の意志による。
2. 私達が御霊によって祈る時、肉によって妨げられることなく祈るので、自己中心や、他の罪の態度は、祈りの中から取り去られる。（ヤコブ 4:2-3）

D. もしある人が、祈りの生活に異言を使いたくないなら、その人は、自分の知性を重んじ、知性で理解できないことを言いたくないというところまで来ている。それゆえ、その人の祈りの生活は、英語（又はその人の一番上手な言葉）に限られ、豊かな祈りの生活の側面を逃しているのである。

第十九章：異言の賜物と解き明かし

I. 異言の賜物と解き明かし

A. 異言の賜物は聖霊の満たしの唯一の証ではない。

B. 第一コリント 14 章の 22 節と 23-24 節はくいちがっているように見える。J.B.フィリップスは、（聖書を）写した人が間違えてしまい、本当は、異言は信者の印ではなく、預言がそうだという意味であろうと信じている。多分パウロは、異言は人が聖霊に満たされた証として役割をはたすと言っている。それは、ある人が、神に私達が単に求めるだけで満たされるのを信じたいと思っただけからである。

C. ある人は、異言の賜物は初教会だけのことで、今日のことでないと思っている。

1. 第一コリント 13:8 を信念の基礎として使っている。しかし、預言は、間違っておらず、知識はなくなるどころか増し加わっている。
2. 彼らは、10 節で「完璧なものは」聖霊を指し、そして、私達が完成された御ことばを持っているので、異言が必要でないと言っている。しかし、異言は聖書のように、教える道具としては用いられたことがない。私達にとって、「完全なもの」イエスを指し、又、再臨を指すので預言と異言はその時まで、有効であると信じている。

II. 異言の解き明かし

A. もし私達が、信者達のグループで話すなら、私達は解き明かしを祈る必要がある。（第一コリント 14:13）そうでなければ、私は建てられるが、他の人はそうでない。（16-19 節）

B. 異言の解き明かしは多くの場合、聖霊によって私達が与えられた考えの現れである。

C. 異言の解き明かしは、神にささげる祈り（複数）である。もし、誰かが教会に宛てて、「解き明かし」をするなら、それは実際に預言であり、異言の解き明かしではない。

第二十章：預言の賜物

I. 聖書の中の預言

A. 旧約聖書の預言は、これから国にやってくる裁きを警告したり、王国時代の約束をしたりすることで、神によって用いられた。彼らは、将来の出来事を予告していた。

B. 新約聖書の預言は、ほとんどの場合神のメッセージを教会に予告していた。例外は、かんばつを予告したアガバス（使徒 11:27-28）とパウロの投獄だ。（使徒 21:10-14）

II. 預言の賜物

- A. 預言の賜物は、異言の賜物よりも教会の中でまさっている。(第一コリント 14:2-5)
- B. 預言の賜物の目的
 - 1. イエス・キリストは預言を通して私達の中に励ましと確信を持って建てられる。
 - 2. 教会は預言により、信頼すること、称賛し祈り、信仰により一歩踏み出す、クリスチャンの活動のために高められる。称賛は教会にとって、特に実行されるべき大事なことである。
- C. 私達の内にはどんな御霊の賜物が働くときにも、信仰が要される。なぜなら、私達は物質の力ではなく、神の力と協力し合わなければならないからである。神は私達の全てを動かすのではなく、私達も意識的に役割をはたさなければならない。(第一コリント 14:32)
- D. 神が預言で私達に語る時、私達の知識でなく、神の霊が私達の霊に語る(ローマ 8:16)
- E. 御霊が教会に宣教師を送るように語る時、おそらく教会の中で、預言者を通して語られる。(使徒 13:1,2)

III. 預言を判断する

- A. 預言に聞こえる全てが真実の預言とは限らない。(第一コリント 14:29) だから、私達はまちがいがから、真実を見抜いて預言を判断しなければならない。
 - 1. 預言を判断する基礎
 - a) 神の言葉に記されていることと調和しているか?(ガラテヤ 1:8)
 - b) 成就したか?(申命記 18:20-22) 100%の確立でなければならない。(第一ヨハネ 4:1-6)
 - c) イエス・キリストと救いについて何を教えているか?

IV. 預言を語る

- A. 預言は、私達に考えや考えるパターンをして多くの場合やって来る。時々、一つの文だけが語るまで与えられ、そして残りの預言が加えられるが、私達は信仰を持って、第一歩を踏み出さなくてはならない。
- B. 神は預言を通して、私達に神の意志と計画を現す。だから、教会の中で実用的な賜物なのである。

第二十一章：助ける賜物

第一コリント 12:28 で献身(ミニストリー)する内容が挙げられている。そして、私達がそれらのミニストリーを成就させるために、助けとなる賜物があげられている。神は私達が召されたミニストリーのための準備をする。助ける賜物は、キリスト教そのもののことである。このミニストリーを実際に行うには、労苦をよく理解することが要求される。聖霊は私達に細かい事に気付かせ、お互いに思わせる。(第一コリント 12:26)

- A. 助ける賜物(複数)は、周りの人に私達の内にはいるキリストを証しする。これらの賜物は、実用的な愛の証明である。私達は主のために喜んで行うべきである。(ローマ 12:8、コロサイ 3:17)
- B. 私達は助けるミニストリーを私達が誉められるために求めることがないように実行しなくてはならない。神が私達のすることから、栄光を受けるべきである。
- C. 私達は、キリストの体の中で、神が置いた場所で満足すべきであり、私達のミニストリーを神のために喜んで成就させる必要がある。

第二十二章：治める賜物

I. 主のために働く

- A. 主のための私達の働きは、主が、結果ではなく働きに応じて報酬を与えるので、無駄にはならない。(第一コリント 15:58)
- B. 私達が自分自身を生きた供え物として神にささげることが、私達ができることで、最も賢いことである。なぜなら、クリスチャンの生活は、豊かに満たされ、神は終わりに忠実な働きに報酬を与える。
- C. 私は、人間的な方法で神の働きをすることは出来ない。私は、神に用いられるために、私の体をささげ聖霊の導きに従うと、私の働きは無駄にならない。

II. 治める賜物

- A. 神は教会を務め、治める助けをするために、個人に油を注ぎ力を与える。

- B. 多くの教会では、役員をする男性（複数）が最も霊的であるわけではない。権力を持つとすると、次の二つの事が起こる。
- 1.自分達が力を持つと求める。
 - 2.権力を広げようとする。
- C. 私達は、イエスが教会のかしらであることを覚えておかなくてはならない。イエスが全てを治め、決断を下す。役員であったとしても、私達はいつもイエスに服従するのである。
- 1.私達が支配する時、神が私達を通し支配していることをいつも知っていなければならない。
 - 2.私達は人を支配したいと思うので、肉の思いに用心しなくてはならない。
 - 3.霊に支配されている指導者はいつも続けて主を求め、喜びをもって責任を果たす。
- D. 教会の中には、いつも治めることが必要な領域がある。初教会で使徒達が務める人を必要とした時、彼らは「評判のよい人、聖霊と知恵に満たされた男性（複数）」を探した。（使徒 6:1-6）
- E. 自然の能力、又は、教育（学歴）は教会のリーダーの中で聖霊に従う態度ほど大切ではない。学歴のない霊に満ちた人は、博士号を持っていながら、霊に満ちていない人よりも上手に治められる。
- F. 私達は、神が召しに従うことを（モーセ、ヨナ、エレミヤが一時的にそうしたように）なおざりにしてはならない。なぜなら、私達は、能力に頼れないからである。神は、人々を通して働かれることをただ望んでいて、神は私達が人生の全ての部分を明け渡すだけで、私達を用いることができる。

第二十三章：教える賜物と勧める賜物

教える賜物と勧める賜物はローマ 12:6-8 と第一コリント 12:11 に出てくる。

I. 教える賜物の必要性

- A. 教える賜物が用いられている時、他の賜物も用いられている。（知恵のことば、知識のことば、預言）
- B. 教える賜物は、認められるべき形で、認められていない。なぜなら、多くの人は、何かを知っていれば教えられると信じているからである。
- C. 教える賜物は、ミニストリーにおいて、たびたび賜物と思われたい。なぜなら、人に勧める賜物のように、すぐに効果的でない（結果が見られない）からである。
- D. 教えることは、私達にするべきことを行う道具を与えてくれる。これらの賜物はバランスをとってもちいられるべきである。（ローマ 10:2）

II. 教会と教える賜物と勧める賜物

- A. 教えを重んじる教会の成長はゆっくりで確かである。それに比べて、感情を基礎に建てられる教会の成長は早いがかないものである。
- B. もし、教会の教師が、教会の第一のゴールは世界宣教であると信じるなら、その教会の群れは、毎週、ミルクのように栄養価の高い救いのメッセージで養われている。エペソ 4:8-13 は賜物の目的はミニストリーが行われるために、教会が完璧にされることであると言っている。

教会は次のために存在する

- 1.神のため — 神の教会は、イエスの血と共に代価が払われた。
 - 2.教会そのもののため — 教会は聖徒がイエス・キリストの御姿に似せられたものになるまで、建てあげられ完全にされる。
 - 3.主の働きをするため
- C. 教会が神の望む形になる時、愛が流れ人々は教えられ、成長する時であり、他の人たちに愛を感じさせ、人々の誠実を示すので好意を持たれる。

III. 神の言葉の勉強

- A. 私達は御言葉の豊かな土地に神との関係の基礎を置く必要がある。
- B. 私達は、神が与えられた一番よい賜物と思い、教える者になることを選ぶべきではないが、私達は、神が私達を教えることで献身する者となるように導かれた時のことを考え、聖書を忠実に読むべきである。もし私達がどんなミニストリーでも、賜物でも、神が用意したものに心を開いていて、神の導きに従うなら、私達は、（キリストの）体の一部とされる。

第二十四章：与える賜物とあわれむ賜物

I. （キリストの）体の中での献身

- A. ローマ書 12 章と第一コリント 12 章でパウロは、人の体と教会を比べている。教会は、違う方向に引っ張り合う党派から、まとまりがないように見えることが良くある。聖霊は、体を一致させ、動きがスムーズになるようまとめる助けをする。
- B. 体の中のあるミニストリーは、他よりも注目されることがある。パウロはミニストリーで自分がたたえられ、注目を集めるよう私達を導く、プライド（高慢）に対して警告している。
- C. あるミニストリーは、目に見える賜物と同じくらい大事だが、人には見えないものがある。与える賜物（ローマ 12:8 与える者）はその一つである。
1. ある人は、必要な人にお金をあげたり、時間を費やしたりするのをいつも進んで行う。神は、与える賜物を持っている人たちを通して、神の賜物が無駄にならないのを知っているの、そのような人々に御力を現すのである。（第二歴代誌 16:9）
 2. 私達は、人に見せるために与えるのではなく、単に心から与えるべきである。（ルカ 21:1-4）残念なことに、教会でたびたび、間違った動機で与えるように勧められ、人々は天の報酬を失ってしまう。（マタイ 6:1-4）
 3. 私達は、何の見返りを期待せず、与えるべきである。私達は受け取った人に恩をきかせてはいけない。
 4. （与えられたものを）無駄にしたり、私達自身のために使おうとすると、神は源を減少させる。
- D. あわれみの賜物を持っている人々は、相手に不愉快な思いをさせずに、兄弟姉妹の霊的な必要を満たすことができる。
1. 道を外れてしまった人々は、神に戻るための扉はまだ開いていて、神はあわれみ深く、赦す方であることを、知っている必要がある。
 2. 私達は、落ち込んでいる信者にとって、厳しく軽べつする態度は、愛のように、効果的でないことに気付いていなければならない。私達は、自分も誘惑にあうかも知れないことを覚えておき、その人が交わりに戻れるようやさしさと寛容をもって接するべきである。（ガラテヤ 6:1）

第二十五章：どうしたら賜物を受けられるか

I. 献身の準備

- A. パウロは、献身と賜物に関するこの章を、神に私達の体をささげるよう挑戦することで始めている。（ローマ 12:1）これは、私達が、賜物を受けるための第一歩である。
- B. 聖霊は、いと高く与えられる贈り物であるが、パウロは一番すぐれた賜物を「心から正直に」願うように命じているということは、私達が、消極的にならなくてよいということである。
1. 私達は（キリストの）体にあつて、献身するための聖霊からの賜物を活動的に求めるべきである。
 2. もし神を待ち望むなら、神から与えられる場所に私達自身を置き、神が用いてくださるよう準備をして待つと、神は私達を用い始める。
 3. 私達は、信仰によって聖霊から（ガラテヤ 3:2）賜物を受ける。

II. 賜物を用いる

- A. パウロはテモテに両方の書簡で、「預言によると長老の手を置いて」（第一テモテ 4:1）、「按手を持って」（第二テモテ 1:6）受け取った賜物を用いるように注意している。
1. 賜物を受けるために他の人に祈ってもらうことは聖書的である。
 2. テモテは見るからに受け取った賜物を遠慮しつつ用いていた。私達は、神が私達の内に働き、私達はただ、用いられようと心を開いた器であることを覚えておく必要がある。
- B. 私たちは神が用いる器として、私達自身に人の注目を引こうとしないよう気を付けなければならない。
1. イエスが、奇跡を行った時、人々は神をほめたたえた。（ルカ 5:26 は多くの例の一つである）
 2. パウロは「私は自分の体を打ちたたいて従わせます。」（実に、自分をあざになるほどたくこと）（第一コリント 9:27）
- C. 神が、私達の中で賜物を用い、御わざを始めると、サタンは賜物を用いることに挑もうといつも存在する。
- D. 私達は、（キリストの）体にあつて、私達の属する小さな交わりの輪の中から、まずミニストリーを実際に始める。そこから、主はもっと大きなものを与えるかもしれない。もし神が与えないにしても、私達は、仕えるということだけで幸せであるべきだ。
- E. 神は、私達それぞれに特殊なミニストリーを持っている。私達の心が、どんなものにも、神が望むことに完全に開かれると、私達はキリストの体にあつて、最初の一步を踏み出したことになる。

The Word For Today

P.O. Box 800 Costa Mesa, CA 92628 (714)-825-9673

A MINISTRY OF CALVARY CHAPEL OF COSTA MESA